

# ピッチング・リサーチを通じた実証研究の発展の 可能性について-サーベイと展望-

名古屋市立大学大学院経済学研究科 坂和秀晃

## 要旨

本稿では、幅広い社会科学分野の実証研究を行う上で有用なピッチング・リサーチ (Pitching Research) について、その手法を紹介・解説するとともに、その研究の使用可能性についての概説を行い、その手法の有用性についての概観を行うことを目的とする。まず、Pitching Research が、責任ある科学 (Responsible Science) を実現するための研究計画方法として優れているという理念を紹介する。次に、Pitching Research の手法として、Reverse-Engineering Pitch, Replication Pitch, Original Pitch の3種類について、その詳細を紹介する。最後に、Pitching Research を行う研究計画全体についてのまとめを行う。今後の展望として、このような事前の研究計画を用いた研究スタイルが広まることにより、若手研究者を中心に多くの研究者の研究発展に資すると考えている。

## 1. はじめに

近年、経済学・経営学分野を中心とした社会科学の分野では、企業レベル・市場レベル・家計レベルなどでの様々なデータの利用可能性が広がり、実証研究の汎用性が高まっている。そのような状況下において、実証研究の論文は増大の一途を辿っている。一方で、責任ある科学 (Responsible Science) として成り立つための実証研究の十分な条件を満たすことが困難になっている状況である (Faff, 2021a, 2021b)。「責任ある科学 (Responsible Science)」とは、以下の3条件を満たす研究とされている (Faff, 2021a, 2021b)。すなわち、①信頼性のある研究 (Credible Research) であり、②妥当性のある研究 (Relevant Research) であり、③独立した研究 (Independent Research) である必要がある。①信頼性のある研究とは、「研究上の貢献を、妥当な科学的方法論で示した研究」になる。②妥当性のある研究とは、「信頼性のある研究上の貢献が、研究コミュニティを越えて、非研究コミュニティのステークホルダーにも有用な研究」である。③独立した研究とは、「信頼性・妥当性のある研究上の貢献が、バイアスのない知識として示されるために、研究上の公正性 (Research Integrity) を満たした研究」である必要がある。経済学・経営学分野におけ

るアカデミアに携わる研究者が、知の生産者として、上述のような「責任ある科学」の要件を満たした実証論文を執筆するためには、一定の方法論に基づいた研究を行った方が、望ましい。その意味で、Pitching Research という研究プロポーザルを、事前に作成して、研究チーム内で十分なコミュニケーションを行うことを重視する研究手法が確立されつつある。Pitching Research は、オーストラリアの著名なファイナンス研究者である Robert Faff 教授が、構築した研究手法であり、Faff (2015)において、そのフォーマットが確立された。その研究手法については、アップデートが続いており、最新の研究方法については、たとえば、SSRN (*Social Science Research Network*)のような形でディスカッションペーパーが公開されている (Faff, 2021c)。本稿の目的は、このように近日の経済学・経営学分野の研究で重視されつつある「責任ある科学 (Responsible Science)」としての論文を作成するための研究手法である Pitching Research についての紹介を行うと同時に、その現実的な利用法についての展望を行うことである。

Pitching Research には、いくつかの活用方法がある。まず、大学院生やポストドクターの研究者などいわゆる若手研究者 (Novice Researcher) が活用する事例を考える。若手研究者の場合、ベテラン研究者の研究指導を受けながら、研究を行い、その過程でベテラン研究者のノウハウを学びながら、論文の作成方法を身につけていくことが多い。しかしながら、論文作成のノウハウを十分に知っているベテラン研究者ほど、研究指導に時間を割くことが難しいことが現状である (Faff, 2015)。このような状況を改善するために、研究アイデアを説明する若手研究者を Pitcher、研究アイデアを聞いた上で、その内容を論文作成に結びつくようにアドバイスをする側を Pitchee として、研究アイデアを巡るコミュニケーションの円滑化を図る方法論として有効に活用することができる (Faff, 2015)。

次に、若手研究者のみならず、ベテラン研究者にとっても、研究アイデアを論文にする前の段階での研究プロポーザル作成方法として役立つ。研究論文を作成する前に、研究計画を研究プロポーザルとして作成することが一般的であるが、このような場合、「どのようなプロポーザルを作るか？」という点に関しては、その分量・内容について、研究者間で統一した見解はないことが多い。そのような場合、研究プロポーザルとして、必要十分な 10 項目について、英文 1000Words 程度でのプロポーザルとしてのフォーマットを作成して作ることで、研究のアイデアについて、より精緻に考えることができる<sup>1</sup>。

最後に、様々なタイプの研究に、Pitching Sheet の活用が行われている。たとえば、著名な先行研究を十分に理解するための Reverse Engineering Pitch、著名な先行研究の再現性を確認するための Replication Pitch、あるいはオリジナルの研究についての研究計画を作成し、その内容のプレゼンテーションを行う為の Pitching Competition など世界的にも多くの研究者・研究コミュニティでの使用が行われている<sup>2</sup>。このような現状においては、Pitching Research の手法を十分に活用することで、研究活動の生産性を高めることは、若手研究者のみならず、多くの場合、若手研究者の導き手となるベテラン研究者にとっても意義

---

<sup>1</sup> 豪州・ニュージーランドでは、AFAANZ (Accounting & Finance Association of Australia and New Zealand) といった学会での研究助成金 (Grants) の申請にも、Pitching Research の Format が取り入れられている。近年の研究では、AFAANZ における研究助成金の獲得に関して、Pitching Research がどのように有用かのインタビューなども計画されている (Gill et al., 2023)。

<sup>2</sup> Pitching Research については、世界中で 340 回以上の講演が行われている (Faff, 2021c)。日本では、名古屋市立大学主催の NCU Research Workshop on Accounting Finance において、2017 年 3 月に初めての講演が行われている。

深いと考えられる。そのような問題意識から、本研究では、責任ある科学 (Responsible Science) の要件を満たすための研究活動を実現するために有益と考えられる Pitching Research の手法についての解説を行う。

本稿の構成は、以下ようになる。第2章において、Pitching Research の方法論について、その先行研究 (Faff, 2015; Faff, 2021c) に基づき、筆者の理解を踏まえた解説を行う。第3章において、実際の Pitching Research の活用方法について、紹介を行う。最後に、第4章において、本稿を結論づけて、結びとする。

## 2. Pitching Research の方法論について

本章では、Pitching Research の方法論について、Faff (2015), Faff (2021c) に基づいて議論を展望する。Pitching Research とは、「研究のアイデア」について、10項目に分けて、その内容を簡潔な研究プロポーザルとしてまとめることで、研究論文の執筆前の段階での研究の構想を明確にするための手法である。10項目について、4-3-2-1 というカウントダウンを行うように、研究内容をより明確にするように考えていくことで、研究アイデアを整理することが目的である。本章では、カウントダウンアプローチと称される10項目について、カウントダウンの順番に4点に分けて、順次その説明を行う。尚、Faff (2015) 等で紹介される実証研究以外の質的研究に関心のある研究者の場合、質的研究についての Pitching Template (Qualitative Pitching Template) を、Lodhia (2019) で提案している。また、その有効な活用方法については、Lodhia (2019) や Faff (2020) などを参照頂けば、詳しく説明されているので、そちらを参照されたい。

### 2. 1. 研究計画準備のための4項目について

まず、研究計画を作成することで、最も基本的に準備すべき4項目 (Preliminary four items) は、以下の (A), (B), (C), (D) である。(A) Working Title (研究の題名), (B) Basic Research Question (基本的な研究上の問い), (C) Key Papers (研究に密接に関連する重要な先行研究), (D) Motivation/Puzzle (研究の動機・研究で明らかにしたい謎) の4項目となる。

まず、(A) でこれから行う研究の題名をつける。論文を投稿した経験のある研究者の場合、おそらく「研究の題名」をつけることに悩んだ経験を持つ人は多いと考えられる。研究論文を投稿した際に、投稿論文を査読に回すかどうかを考える編集者 (Editor) 及び、その審査を行う査読者 (Reviewer) の双方は、「研究の題名」を見て、「どのような論文なのか？」というイメージを持つ<sup>3</sup>。その意味で、「研究の題名」と「実際の研究内容」がずれている場合、その研究について悪いイメージを持つ可能性が高い。したがって、研究内容を適切に表すためのキーワードを含む題名をつけることが肝要になる。

次に、(B) では、研究計画では、「何を明らかにしたいのか？」を明確にするための「研究上の問い」を1文で表す<sup>4</sup>。若手研究者の場合、研究計画を立てる時に、多くの点を含めた複雑な問いを立てることが多い。

<sup>3</sup> 筆者は、査読付き雑誌の *Helicon* 並びに *Asian Academy Management Journal of Accounting & Finance* の Associate Editor (副編集長) を務めている。その際、「誰に査読を回すか？」を判断する際には、まず「研究の題名」を見て、どのような論文かのイメージを持って考えることが多い。

<sup>4</sup> 2017 NCU Research Workshop on Accounting & Finance の場では、実証研究では仮説を複数検証することが多いので、1文で「問い」を表すことは難しいのではないかととの質問が、日本の研究者により行われた。この点については、主要な仮説に絞っ

あるいは、余りにも一般的な問いを立ててしまい、「過去の研究での問いと何が違うのか？」という点が曖昧になってしまう場合も多い。したがって、研究段階で、その研究は「何を明らかにしたいのか？」という点を簡潔にまとめることで、研究の方向性を明確にすることが可能になる。

3点目に、(C) では、自身の研究に密接に関連する3本の重要で新しい研究を明示する。世の中のほとんどの研究は、既存研究の延長線上にある。したがって、自身の研究が、「どの研究に基づいて実施されているか？」について、第3者にも明確に分かるようにするために、3本の重要な先行研究を挙げるのが重要である。「1本でも良いのではないか？」という疑問を持たれるかもしれない<sup>5</sup>。特に、日本の実証研究を行う場合、米国等の先行研究に基づいて、それを日本に適用するというタイプの研究が考えられる。そのような研究に関しては、オリジナルな研究というよりは、昨今、経済学・経営学の分野で増えているレプリケーション (Replication) の研究と考えられる<sup>6</sup>。レプリケーション研究の場合、再現するための基論文となるオリジナルな研究では、その時点の多くの先行研究との関連性が説明されていることが多い。その意味で、オリジナルな研究を行う場合には、3本程度の過去の重要かつ最新の研究との関連を説明することが望ましい (Faff, 2015)。

4点目の(D) は、(A) から (C) で作成した「過去の重要研究に基づいた研究計画独自の問い」について、「何故その問いを明らかにすることが重要なのか？」あるいは、「その問いを解明することで、既存研究で解明されなかった謎 (Puzzle) を解明できるのか？」といった点を説明することになる。多くの先行研究には、研究上の限界があり、解明しきれなかった「謎」がある。そのような先行研究でのまだ解明されていない「謎」について、ある程度の解明を行うことができるといった点を示すことで、読み手に対して、研究計画の重要性を示すことが可能になる。

## 2. 2. 実証研究計画準備のための3項目について

カウントダウンの「3」の段階で用意すべき3項目は、(E) Idea (研究を進めるための具体的な考え)、(F) Data (研究を進める上で必要なデータ)、(G) Tool (実証研究上の手法)になる。まず、(E) Idea に関しては、研究準備の為の4項目でまとめた点をより具体的に説明することになる。研究上の「謎」がある場合、先行研究には対立的 (Conflicting) な考え方に基づく実証結果が導出されていることも多い。その場合は、それらの2本の対立する先行研究の結果について紹介した上で、自身の研究計画では、「どのようにその対立的な考え方に基づく議論に貢献する実証研究を行うか？」といった点を記述することになる。これらの対立的な考え方を統合した新たな見方を導出することができれば、望ましい。近年の多くの実証研究では、「仮説構築型」の研究であることが多いので、そのような対立的な先行研究がある分野に貢献できるような「仮説」を構築できることが必要となる。

---

て、問いを作ることで、まずは研究の内容を分かりやすく伝えることが重要だとこの旨の回答がFaff教授よりなされた。

<sup>5</sup> 2019 NCU and Chubu JSME Research Workshop on Accounting & Finance の場で、そのような質問が、著名な日本の研究者から行われた。その意味では、日本のファイナンス研究コミュニティの中では、研究計画を立てる際に、主要な先行研究の本数を少なめにする傾向がある。主要な先行研究を少なめ (1本あるいは2本) にした場合、研究の構想段階で、計画中の論文と過去の重要な先行研究の帰結との関係性が十分に説明できない可能性があるため、3本にした方がいいというのが、その場でのFaff教授の回答であった。

<sup>6</sup> Top Journal である経済学分野の American Economic Journal, 経営学分野の Strategic Management Journal などでも、数多くのレプリケーション研究論文の出版を行っている。

(F) Data では、(E) IDEA を検証するために、どのようなデータを入手するか?といった点を記述する。会計・ファイナンス分野では、多くの場合、企業の公開データ、市場のデータなどを商業ベンダー（日経メディアマーケティング, Quick, 金融データソリューションズ, 東洋経済新報社, FactSet, Compustat）などから取得して分析することが多い。しかしながら、より詳細な人の行動に関するデータについては、「質的データ」を入手する必要がある、その場合は、企業アンケートなどの手法で入手することもある（Graham and Harvey, 2001 等）。あるいは、経営学分野を中心に、インタビューに基づくデータを入手する場合もある。(G) Tool では、どのような実証研究上の手法を用いるかということの説明をする。この際、経済学・経営学の分野では、「因果推論」が重要視されていることから、「どのように被説明変数と説明変数間の因果関係を識別するか?」といった点についての手法選択などを明記しておくことも重要である。たとえば、操作変数法、傾向スコア分析 (Propensity-Score Matching), 差分の差分分析 (Difference-in-Difference Analysis), 回帰不連続デザイン法 (Regression Discontinuity Design) などが用いられることが多い。近年のビック・データの取得の可能性拡大などにより、より高度なデータ分析の手法が用いられていく可能性もある。

### 2. 3. 重要な2つの問い

カウントダウンの「2」の段階は、(H) What's New? (研究の新規性), (I) So What? (新規に明らかにした点にどのような意味があるか?) の2点である。(H) What's New? の新規性に関しては、Responsible Science (責任ある科学) の意味から非常に重要である。既存の重要な先行研究 ((C) で自身が選んだ Key Papers) と比較して、「どのような点に新規性があるのか?」という点を明確にする。勿論、研究計画の段階なので、実証結果が分かっている訳ではない。しかしながら、「研究計画に基づく実証研究がどのような意味で、先行研究と比べて異なり、新規性があるのか?」を予想して記述することにより、Responsible Science (責任ある科学) の観点に基づく研究計画を立てることが可能になる。

(I) So What? については、研究上の問いを明らかにすることは、「誰にとって、どのように役立つか?」といった点を明らかにする。既存の理論的帰結に対して、その検証を行った実証研究であれば、「理論研究のどの部分について、その検証を行うことで理論の妥当性を示したか?」といった点を明記する。あるいは、「誰にとって役立つ問いか? (Who Cares?)」といった点も重要である。たとえば、コーポレート・ファイナンス分野の研究であれば、「企業経営者に対して役立つのか?」、「株主にとって役立つのか?」など「様々なステークホルダーの誰にとって役立つのか?」といった視点が考えられる。

### 2. 4. 端的に言うと? (One Bottom Line)

最後に、カウントダウン最後の「1」の部分で、どのような研究においても重要となる (J) Contribution について記述を行う。研究上の貢献については、学術論文を執筆中の若手研究者にとっては、必ずといっていいほど、研究指導者から明記するようにアドバイスを受ける項目である。「(H) 新規性のある問いについて解明を目指し、(I) それらがどのように理論の妥当性などを示したか?」という点を踏まえて、「それらの点に分かることで、研究計画が属する研究分野にどのように貢献ができるのか?」をまとめることになる。論文を執筆する際にも、最後の結論あるいは議論の部分で執筆する必要があるが、その部分について、最初に考えておくことで、価値ある研究計画を完成することが可能になる。

### 3. Pitching Research の活用方法について

本章では、具体的なPitching Researchの手法について、研究活動を推進するために、どのように使用すべきか？という点からその方法論について、論じている。実際に、「Pitching Research を用いた研究活動をどのように行ったか？」については、例えばAli (2017)などにまとめられているため、そちらを参照されたい。本章では、Pitching Research を使った様々な研究手法についての紹介を行い、「今後の若手研究者あるいはその研究指導者がどのように有効に活用すべきか？」という点についての展望を示したい。3.1 節では、Reverse-Engineering Pitch の活用について言及する。次に、3.2 節では、Replication Pitch の活用について紹介する。3.3 節では、Original Study のPitch の活用方法について述べる。

#### 3. 1. Reverse-Engineering Pitch の活用について

Reverse-Engineering Pitch とは、過去の Top Journal に乗った引用件数も多いような著名な先行研究についての理解を深める為に、そのような研究についてのPitching Sheetを作成することで、その研究を実践することの意義についての理解を深めるための研究手法である(Faff, 2015 etc.)<sup>7</sup>。若手研究者が「研究論文」を執筆する際の先行研究を調査する段階で、その重要な先行研究自体の内容について、Pitching Sheet にまとめることで、その理解を深めることの意義は大きい。Reverse-Engineering Pitch の活用方法については、Salehuduna (2017) について、詳細に解説が行われている。同研究では、研究論文を執筆する大学院生が、研究前の段階で、自身の研究の主要な先行研究 (Key Papers) についての理解を深める為の Reverse-Engineering Pitch の活用を奨励している。特に、Key Papers の重要な部分を理解できることと Key Papers で行われているような研究の展開方法を、自身の研究に生かすことが可能になる点が優れていると主張している。加えて、研究指導者 (Pitcher) の側からしても、自身の指導している若手研究者の先行研究の理解度を確認するための有益な方法であると考えられる。

母語が英語でない非英語圏の若手研究者にとっては、英語での先行研究の理解自体が困難になる可能性もある。非英語圏の研究者のために、Faff et al., (2018)では、日本を含む各国の研究者が、それぞれの母国語と英語での両方の Pitching Sheet を作成して公開を行っている。同論文では、Online Appendix をつけて、非英語と英語のテンプレートを両方、公開している。たとえば、日本語のテンプレートには、それに対応する英語のテンプレートもつけて公開されているため、日本語版と英語版を比較することで、よりよく理解を深められるようになっている。

#### 3. 2. Replication Study における Pitching Sheet の活用

近年、「責任ある科学 (Responsible Science) の一環として、レプリケーション研究 (Replication Study) の価値が重視されるようになってきている。過去の研究が「十分に再現できるかどうか？」というレプリケーションの危機 (Replication Crisis) については、自然科学分野 (Baker, 2016) のみならず、経済学分野

---

<sup>7</sup> Reverse-Engineering Pitch については、開発者の Robert Faff 教授の Queensland 大学等の研究指導などでも取り入れられている。

(Maniadis et al., 2017) あるいは経営学分野(Bettis, 2012)などでも警鐘が鳴らされている。経済学分野のReplicationの動向については,Hoffler (2017), 経営学分野の動向については,Block et al., (2023)などに詳しく紹介されている。ファイナンスの分野でも,Jensen et al., (2023)等で最新のReplicationの動向が紹介されている。また,インタビュー調査などの質的研究についてのレプリケーションについても,Aguilnis and Solario (2019)において論じられている。

レプリケーション研究自体が,先行研究の再現性を試す意味では,重要である。例えば,過去の重要な研究について,「異なる状況(年数,国,産業)でどのように結果が再現できるか?」は重要である。その意味で,アジア太平洋地域のファイナンス分野の実証研究において,そのようなReplication Studyを行うことの意義は大きい(Faff, 2023)。

アジア太平洋地域のファイナンス分野の実証分析において,「米国の主要研究の実証結果を異なる国の状況で再現できるか?あるいは,応用できるか?」といった観点から,Pacific-Basin Finance JournalにReplication Sectionが設置されている。同Sectionでは,まずはレプリケーションの対象となるファイナンス分野の重要な論文として,過去3年間以内にFinanceのTop3のジャーナルである*Journal of Finance*, *Journal of Financial Economics*, *Review of Financial Studies*に出版された論文を選択して,その論文のレプリケーションを行うことがその目的となる。2019年から2022年までで,31本のレプリケーション論文が出版され,その内,中国でのレプリケーション論文が14本,オーストラリアの論文が9本,日本の論文が4本などになっている(Faff, 2023)。

レプリケーションにおけるPitching Researchの使用については,Pacific-Basin Finance JournalのReplication Sectionにおいて行われている。まず,レプリケーションする対象論文を探し,その論文についてのPitching Sheetを完成させる。次に,Pitching Sheetについて,審査を受ける。この審査で問題なければ,実際に過去の研究の主要な結果をレプリケーションした論文を完成させ,投稿するといった手順になる。レプリケーション用のPitching Sheetでは,Sheetに記入すべき10項目の流れが少し異なる。具体的には,(C) Key Paper(s)の部分で,1本のレプリケーションしたい論文をTarget Paperとして,それに密接に関連した他2本のKey Paper(s)を選択することになる。また,(F) Dataの部分では,レプリケーションしたい他の国のデータとレプリケーションの対象とするTarget論文が対象とする米国のデータの双方について,説明する必要がある。

上述のようなReplication Pitchを通じることで,米国の主要な先行研究と他のアジア太平洋の国での検証結果の違いを明らかにすることが可能になる。たとえば,著者等のレプリケーションの研究では,「SFAS131における米国企業のセグメント情報開示が企業の投資行動に与える影響」を分析した「Javaraman and Wu (2019)の研究の効果が再現できるかどうか?」を考え,彼らの論文をレプリケーションの対象と考えた(Sakawa et al., 2020)。その上で,日本における同様の会計基準改正と見なされる『「企業会計基準17号:セグメント情報等の開示に関する会計基準」が,日本企業の投資行動にどのような効果を与えるか?』を検証している(Sakawa et al., 2020)。Javaraman and Wu (2019)の研究自体が,「経営者による情報開示がどの程度市場に反映されるか?」,「その市場の反応を経営者はどの程度学習して,投資行動に反映させるか?」といった理論モデル(Bond et al., 2012)の研究を実証分析している。したがって,セグメント情報開示が企業の投資行動に与える効果の日米企業間での差異を検証することで,理論モ

デルに対する貢献も可能なレプリケーション研究と考えられる。

責任ある科学 (Responsible Science) の観点からは、レプリケーション研究自体は、Replication Crisis の問題を検証する上でも有益であると考えられる。経済学・経営学の各分野でのレプリケーション研究を進めるためにも、Pitching Research の方法を用いることで、より精緻にターゲットとなる雑誌のレプリケーションを適切に行うことに資すると考えられる。

### 3. 3. Original Study についての Pitching Sheet の活用

Pitching Research を生かす最も標準的な方法は、新規の Original の研究を行うために、事前の研究計画を Pitching Sheet Template にまとめる方法である。Pitching Research の方法論についてのノウハウを学ぶためには、「Pitching Template 自体の解説論文 (Faff (2015), Faff (2017)) を理解することと、その内容を解説した Web 教材を学ぶことが重要である。」(Ali (2017))。Pitching Research の手法を創設した Robert Faff 教授は、方法論を世界の若手研究者に伝えるために、InSpiR2eS (International Society of Pitching Research for Responsible Science) という学術ネットワーク<sup>8</sup>を形成して、世界中の若手研究者が、Pitching Research を学べる仕組みを作っている。たとえば、フリーの Pitching Research のコースなどが、同学術ネットワークの Website において公開されている<sup>9</sup>。

ある程度、Pitching Research の方法論について理解が深まっていく次の段階についても、Ali (2017) では、以下のように紹介している。Ali (2017) では、「若手研究者などは、Pitching Research の方法を用いて試行錯誤を繰り返す内に、Pitching Template を作成する若手研究者などの研究ノウハウが習熟してくる」と予想している。次のステップとして、Faff (2017) では、「” Cues for Pitch”<sup>10</sup> という形で、どのような Pitch が優れているのか」の実例をオンライン上で示している。Ali (2017) では、「実例を学習しながら、自身の Pitching Template の改善を図り、それを生かした形で、研究論文を作成し、投稿することが望ましい。」としている。また、実際に、Pitching Research を用いたプレゼンテーションに参加することも奨励している。

Pitching Research を用いたプレゼンテーションとしては、同学術ネットワーク主催で、IGPRC (InSPiR2eS Global Pitching Research Competition) という若手研究者を対象とした世界の Pitching Research に関するイベントなどが開かれたりしている。また、ファイナンス関連の国際会議 (2023 年度で言えば、World Finance Association, Elsevier Finance Conference) などでは、Pacific-Basin Finance Journal を含むいくつかの Journal の Editor が集まり、Pitching Sheet やそれに基づいた研究論文の報告について評価を行う Session を作ったりしており、Pitching Sheet を活用した Original Study の研究は世界的に盛んになってきている潮流にある。

日本国内でのイベントとしては、著者等も何度かのイベントで、Faff 教授を招聘して、Pitching Research

<sup>8</sup> 世界 20 カ国以上のネットワークであり、筆者は日本での普及活動を依頼される Node-leader の役割を果たしている。

<sup>9</sup> <https://pitchingresearch.com/inspir2es-network/> 上にて、Pitching Research に関するフリーのコースを始め、多くの有益な情報が公開されているので、参照されたい。

<sup>10</sup> オンライン (<https://www.pitchmyresearch.com/>) で、‘cues for the pitcher’ は入手可能である。



に関する講演を行っていただいたり、日本研究者向けのイベントの開催を行ったりしている<sup>11</sup>。このような機会を活用することで、Original Study についての Pitching Sheet を作成することができれば、より良い研究計画を立て、それに基づいた研究論文を作成することが可能になると考えられる。

#### 4. 結論

本研究では、昨今の経済学・経営学の実証研究の流れとして、「責任ある科学 (Responsible Science)」の3要件 (①信頼性のある研究 (Credible Research) であり、②妥当性のある研究 (Relevant Research) であり、③独立した研究 (Independent Research) である。) を満たした研究が求められている背景を概説している。更に、それらを実現するための研究上のツールとしての Pitching Research について、その内容と活用方法などについて、先行研究をサーベイすると同時に、概観を行っている。本研究で得られた結論は、以下の4点にまとめることができる。

第一に、「実証研究を行うための Pitching Research の10個の要素 (Items) とそれらをどのように作成するか?」についての説明を、Faff (2015) 並びに、Faff 教授が日本で 'Pitching Research' について講演を行ったワークショップ (2017 NCU Research Workshop on Accounting & Finance や 2019 NCU and Chubu JSME Research Workshop on Accounting & Finance) の折の経験などを交えながら、説明を行っている。特に、「研究上の問い」を分かりやすく表現し、「主要な先行研究 (Key Papers)」を3本選び、その3本との関連性を説明するという点に、日本のベテラン研究者の研究手法との差異と特徴があった。3本程度の先行研究との関連性を考えることで、先行研究における理論的対立などと自身の研究計画の関連性についても、事前に考えることができ、その意味では、3本の先行研究を Key Papers として選択することに意味があると考えられる。

第二に、Pitching Research を用いて、主要な先行研究を理解する方法論として、Reverse-Engineering Pitch の方法を解説した。若手研究者は、「重要な先行研究をしっかりと読むように」という研究指導を受けることが多いものの、その方法論について、分からない場合も多い。その意味で、過去の先行研究について、自分がその研究の書き手 (Pitcher) になったと考えて、Pitching Sheet を作成することにより、「過去の先行研究は、どのように作成されたか?」のノウハウを得ることができる。また、研究指導者 (Pitcher) の立場からしても、指導対象の若手研究者の理解を確かめる上で有益な方法であると考えられる。

第三に、レプリケーション研究に対する Pitching Research の応用を示している。レプリケーション用の Pitching Sheet では、Sheet に記入すべき10項目が少し異なるため、その方法論と実例 (Sakawa et al., 2020) についての紹介を簡単に行っている。現在の経済学・経営学分野では、レプリケーション研究の重要性が強調されていることもあり、重要な研究手法と考えられる。

最後に、オリジナルの研究を行う上で、「どのように Pitching Sheet を活用すればいいか?」という点について、それらの点についてまとめられている研究 (Ali (2017), Faff (2017)) などの内容を紹介して

---

<sup>11</sup> 直近の予定としては、2024 All Japan PBFJ Finance Shark Tank Special Conference (2024年3月20日)において、Faff 教授からの「Pitching Research の新たな進展」についての講演並びに、日本研究者の Finance 分野の Pitching Research を用いた研究カンファレンスが、名古屋で行われる。特に、若手研究者には、このような機会を通じて、Pitching Research を用いた研究手法を活用してほしいと考えている。

いる。また、昨今、拡大している Pitching Research のネットワークである InSPiR2eS というネットワークの活動を紹介し、それらを活用して Pitching Research を用いた研究活動が進展できることを示している。

本研究では、近年の経済学・経営学の世界で、データの使用可能性が増えるとともに、増えつつある実証研究の研究計画を作成する Pitching Research について紹介した。著者自身も、Pitching Research の手法を使用することで、自身の研究を格段にブラッシュアップできたと考えている。本稿の読み手が、研究計画の構築や研究活動に行き詰まった折に、本稿を読み、Pitching Research を活用することが、研究発展の手助けになることを願っている。

## 謝辞

本稿の内容は、2023年9月に、九州大学大学院経済学研究科でのセミナー報告の内容をブラッシュアップしたものである。特に、内田交謹先生（九州大学）、渡辺直樹先生（名古屋市立大学）からは有益ないくつかの示唆を頂いた点、感謝したい。本稿を執筆するにあたり、名古屋市立大学経済学会からの支援を頂いている。ここに記して感謝を申し上げる次第である。

## 引用文献

- Aguinis, H., Solarino, A. M., 2019. Transparency and replicability in qualitative research: The case of interviews with elite informants, *Strategic Management Journal*, Vol. 40, No. 8, 1291-1315.
- Ali, S., 2017. Women in the boardroom and their impact on default risk: A pitch, *Accounting Research Journal*, Vol. 30, No. 2, 137-146.
- Baker, M., 2016. Is there a reproducibility crisis?, *Nature* 533, 452–454.
- Bettis, Richard A, 2012. The search for asterisks: Compromised statistical tests and flawed theories, *Strategic Management Journal* 33, 108–113.
- Block, J. H., Fisch, C., Kanwal, N., Lorenzen, S., Schulze, A., 2023. Replication studies in top management journals: An empirical investigation of prevalence, types, outcomes, and impact, *Management Review Quarterly*, Vol. 73, 1109-1134.
- Bond, P., Edmans, A., Goldstein, I., 2012. The real effects of financial markets. *Annual Review of Financial Economics*, Vol. 4, 339–360.
- Faff, R., 2015. A simple template for pitching research. *Accounting & Finance* Vol. 55, 311–336.
- Faff, R. W., Lay, J., Smith, M., 2017. PoW! Using Social Media to Leverage Research Visibility–‘Pitch of the Week’ Posts in LinkedIn. *SSRN Working Paper*, No. 2894069.
- Faff, R., 2020. Pitching research: ‘qualitative cousins’ and the ‘extended family’, *Accounting and Finance*, Vol. 60, 227-269.
- Faff, R., 2021a. PBFJ editorial – a declaration about responsible science. *Pacific-Basin Finance Journal*. Vol. 69, No. 101650.
- Faff, R., 2021b. Responsible Science Matters. *SSRN Working Paper*, No. 3880341.
- Faff, R., 2021c. Pitching research. *SSRN Working Paper*, No. 2462059.
- Faff, R., Kastle, T., 2016. Pitching Research for Engagement and Impact. *SSRN. Working Paper*, No. 2813096.
- Faff, R., Kastle, T., Axelsen, M., Brosnan, M., Michalak, R., Walsh, K., 2021. Pitching research for engagement and impact – a simple tool and illustrative examples. *Accounting and Finance*, 61 (2), 3329–3383.
- Faff, R, Shao, X, Alqahtani, F, Atif, M, Bialek-Jaworska, A, Chen, A, Duppati, G, Escobar, M, Finta, M, Jeny, A, Li, Y, Machado, M, Nishi, T, Nguyen, B, Noh, J-E, Reichenecker, J-A, Sakawa, H, Vaportzis, E, Widyawati, L, Wijayana, S, Wijesooriya, C, Ye, G & Zhou, C., 2018. Pitching non-English language research: A dual-language application of the Pitching Research Framework, *Journal of Accounting and Management Information Systems*, Vol. 17, No. 2, 266-290.
- Gill, C., Mehrotra, V., Moses, O., Bui, B., 2023. The impact of the pitching research framework on AFAANZ grant applications, *Pacific-Basin Finance Journal*, Vol. 77, No. 101933.
- Graham, J.R., Harvey, C.R., 2001. The theory and practice of corporate finance: evidence from the field. *Journal of Financial Economics*, Vol. 60, 187–243.
- Hoffler, J. H., 2017. Replication and Economic Journal Policies, *American Economic Review*, Vol. 107, No. 5, 52-55.
- Javaraman, S., Wu, J.S., 2019. Is silence golden? Real effects of mandatory disclosure. *Review of Financial Studies* Vol.

32, No. 6, 2226–2259.

Jensen, T. I., Kelly, B., Pedersen, L. H., 2023. Is there a replication crisis in Finance?, *Journal of Finance*, Vol. 78, No. 5, 2465-2518.

Lodhia, S., 2019. What about your qualitative cousins? Expanding the ‘pitching research’ template, *Accounting and Finance*. Vol. 59, 309-329.

Maniadis, Zacharias, Fabio Tufano, and John A. List, 2017. To replicate or not to replicate? Exploring reproducibility in economics through the lens of a model and a pilot study, *The Economic Journal* Vol. 127, F209–F235.

Sakawa, H., Watanabel, N., Yamada, A., Duppati, G., 2020. The real effect of mandatory disclosure in Japanese firms. *Pacific-Basin Finance Journal*. Vol. 60, No. 101298.

Salehuduna, I., 2017. “Reverse Engineering” the Pitching Research Template: A Simple Tool to Help Understand the Academic Literature. *Accounting and Management Information Systems* Vol. 16, No. 1, 203-210.